



ホスピスと命の対話

「命を見るために。世界を見るために。
(To see the life; to see the world)」と
は、グラフィ誌『ライフ』(二〇〇七年終
刊)の創刊の言葉であるが、その言葉は
次のように続いている。

「偉大な出来事を目撃するために。貧し
き人々と人の尊厳を見つめていくために
——」(創刊編集者ヘンリー・ルースの
一九三六年の言葉より)

本書でその思想についての考察が展開
される岡村昭彦(一九二九〜八五)は、
六四年に『ライフ』に掲載されたベトナム
戦争の写真によって、フォトジャーナ
リストとしてデビューした人物である。

その後は、北アイルランド紛争や、ピ
アフラ戦争、南ベトナム軍のラオス侵攻
などを取材する一方、晩年には「バイオ

エシックス(生命倫理)」という言葉
掲げてホスピスの問題に取り組んだこと
が知られている。

生命操作の扉を開いたDNAの二重らせん構造の発見者ワトソンとクリックがノーベル賞を受賞したのは一九六二年のことだが、岡村は『ライフ』誌の表紙を飾ったDNA模型の写真について、「その表紙の写真は、私の頭脳の中では仏教徒の(アメリカ大使館前での)焼身自殺と重なり合って離れません」と言ったという。

本書では、バイオエシックスやホスピスの紹介者としての岡村の足跡が辿られるなかで、ホスピスとコミュニティは、いかに在るべきか、という問いが描き出されてゆく。

岡村昭彦にとってホスピスとは、死にゆく者自身の手に「死」を奪還する試みではなかったか、と著者は問う。岡村は一九八五年に五十六歳で世を去ったが、「二十一世紀というのは、我々民衆がデシジョンメイキング(決定)に参加する時代にならなければならない」という言葉を残している。

(評・鳥井隆洋)

※値段の表記は本体価格

思想家としての岡村昭彦に迫る稀有な試み

彼のホスピス論が丹念に読み解かれる

竹之内裕文

高草木光一 著

岡村昭彦と死の思想

「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス
1・26刊 四六判272頁 本体2700円
岩波書店



岡村昭彦とは何者だったのか。なんどいっても彼は、報道写真家であった。南ベトナム政府軍に従軍取材し、ベトナム戦争最前線の写真を撮り続けた。その後、敵方にあたる南ベトナム解放民族戦線の解放区に潜入し、解放戦線副議長との会見取材に成功した。しかし、それによって五年間の南ベトナム入国禁止処分を受け、アフリカ、ラオス、アイルランドへと、フィールドを拡げていった。写真誌「LIFE」には、それらの写真が数多く掲載された。

にもかかわらず岡村は、香港でライカのカヌヲを購入した際、フィルムを装填できなかったという。このエピソードについてテレレ番組で尋ねられたとき、彼はこう答えた――「たしかにフィルムの詰め方は知りませんでした。が、何にレンズを向けるべきかは知っていました。だから、私はプロでした」。岡村の写真は、見る者に対して、写真とは何

か、撮影するとはどういうことかと、鋭く問いかけてくる。岡村にほまた、社会運動家なしいは活動家としての顔もあった。三池闘争に参加し、炭鉱労働者街に住み込み、やがて部落解放同盟で活動した。部落の各戸をまわり、食を共にしながら、本首で語り合った。静岡岡寸又峽温泉の旅館に籠城した在日韓国人二世の金婚老を被告とした裁判では、特別弁護人を務めた。静岡岡舞阪町（現在は浜松市に編入）では、漁民闘争に身を投じた。「同情は連帯を拒否したときに生まれる」、それが岡村の活動を支える信念であった。

さらに岡村は、バイオエシックスの伝道者でもあった。ただし岡村にとってバイオエシックスとは、「生命倫理学」と呼ばれる新しい学問分野ではなく、マイノリティ（社会的弱者）の権利運動を意味した。この意味でのバイオエシックスを日本の、あるいは東

アジアの土壤に根づかせるべく、岡村は木村利人とも、日本列島縦断のバイオエシックス講演旅行を敢行した。このように岡村は、自らの思想的到達点を固守することなく、駆り立てられたように前進し、新たな地平を次々に拓いていく。本書からは、その躍動感、圧倒的な存在感、そして力のある言葉が伝わってくる。しかも本書は、報道写真家でも、社会運動家でもなく、思想家としての岡村昭彦に迫る稀有な試みである。その足がかりとされるのが、書名にも登場する「いのち」と「死の思想」である。

一見したところ無関係に映るベトナム戦争とバイオエシックスも、岡村の中では「いのち」に対する侵犯のいかに立ち向かうかという問題関心によって接合されている。他方、「死の思想」を読み解くにあたっては、「自分の死を守る」という言葉が考察の鍵を握ると思われる。「自分の死」をいつい何から守るのか。この問いとともに、既成事実化した脳死・臓器移植、声高に主張される安楽死・尊厳死、さらにはホスピスケアさえも、「いのち」に対する侵犯的営為として立ち現れるのである。

本書では、岡村のホスピス論が丹念に読み解かれる。それは岡村の「思想」を継承しようという著者の堅固な意志と深い愛情に支えられてのことだろう。しかし書名にかかわる問いが残されているように思われる。それはホスピスがいかなる意味で、「いのち」を語り継ぐ場であるかという問題である。

ここで注意しておきたいのは、「ホスピス」が「緩和ケア」から区別されること、それに応じて英国のシスター・ソントラスではなく、19世紀アイルランドのヌアリー・エイケンヘッドが近代ホスピスの創始者とされることである。岡村にとってホスピスとは、いすれ必ず「死んでゆく者」、その意味での「弱者」の平等性、対等性、連帯可能性に基づいた「ともに生きていこう」コミュニティ、ホームを意味する。岡村は、ホスピスのうちに「医療を超えた新しい文化の誕生」を見とり、今日ならば「医療化」と呼ばれる事態を徹底的に批判するのである。

ホスピスを「コミュニティ」なしい「ホーム」として捉える岡村のアプローチには、説得力があるし、大きな可能性が秘められている。しかし問題はその先にある。それがどのような性格の「コミュニティ」、ホームなのか問われるからである。それと関連して、本書ではほとんど言及されないものの、ホスピスの宗教的性格も問題になるだろう。これらはいずれもソントラスの人によって問われたものの、根本的には未決のままに遺された課題である。

同様に、ホスピスを「いのち」を語り継ぐ場」と捉える場合、岡村は、そして著者は、「いのち」という言葉をどのように理解しているか。「いのち」を語り継ぐとは、どういうことか。この点については、本書は立ち入った考察を示していないように思われる。今日の日本社会には、「いのち」という言葉が氾濫している。だとすれば、「共生」という概念について著者が指摘するように、「いのち」の多義性と隘路こそが考察の中心に据えられるべきであろう。

岡村は、死にゆく人の主体的な死の視点を貫き通そうとした。そこからどのような「コミュニティ」が生まれ、互いの生と死が「いのち」の営みとして受けとめられるのか。その確かな展望を得たとき、私たちは初めて「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピスに到達するのではないだろうか。

緩和ケアの確立と普及とともに、医療化と制度化が進行し、ホスピス運動を牽引してきた問題意識は忘れられつつある。かつてソントラスが語ったように、ホスピスという「聖なる牛」を撃つことが求められているのである。岡村昭彦の「死の思想」は、その確かな足がかりを与えてくれる。本書を通して評者は、そのように確信するに至った。労作の登場を心から歓迎した。（静岡大学教授）



『岡村昭彦と死の思想』

「いのちを語り継ぐ場としてのホスピス」

(二六四頁、二七〇〇円〔税抜〕、岩波書店)

たかくさぎ こういち
高草木光一

(慶應義塾大学経済学部教授)

数年前、中国・ウルムチからマリ
ア・サキム氏を慶應義塾大学経済学
部に招いてウイグル医学について講
じてもらったことがある。当時の日
本では、臓器移植法（一九九七年）
の改正が日程に上っていて、脳死・
臓器移植をめぐる議論が再び活発に
なっていた。その最先端の議論につ
いてサキム氏は、思いがけないコメ
ントを残した。「伝統医学であるウ
イグル医学には、臓器移植の技術は
ありません。幼くして亡くなる子は
かわいそうにも思いますが、ウイグ
ルでは『神に愛された子』と呼んで
祝福しています。神がその子を愛す
るがあまり、自分の手許に早く呼び

戻したのだと考えます」。

この素朴な言葉の前には、脳死・
臓器移植という技術自体が醜悪なも
のに思えてくる。どんなに医学が進
歩しても、人間が死を免れることは
ない。医学にできるのは暫定的な救
済でしかないにもかかわらず、医学
への過度の期待は、死と向き合うこ
とを妨げ、死をますますわれわれか
ら遠ざけてしまっている。

国会への上程が準備されている尊
厳死法案をめぐる議論にしても、も
どかしさを拭えない。推進する側は、
自己決定権の論理でリヴィング・ウ
イルに基づく「延命治療」の不開始・
中止を唱えるが、いずれ自己決定権

など骨抜きにされてしまうことは、
「尊厳死先進国」の現状を見ても明
らかである。反対する側の「滑り坂
論」は批判としては当を得ているも
のの、「ピンピンコロリで死にたい」
という多数の人の思いを掬い取る受
け皿を用意することができない。法
制化の是非に留まって、「尊厳ある
死」とは何かというところまで議論
が深まっていかない。

「いかに生きるか」という普遍的
な問いのなかに、「長くなつた死の
過程をどのように生きるか」という
問いを組み入れたときに、ホスピス
という新しい医療が立ち現われる。
そのホスピスを一九八〇年代に日本
で紹介した先駆者でありながら、ホ
スピスのあり方に根源的な疑問を投
げつづけたのが、ベトナム戦争の報
道写真家として著名な岡村昭彦であ
る。戦場に横たわる無残な死体の対
極に主体的な死のイメージを追い求
めた岡村の思考と行動の跡を辿るこ
とで、死について考えてみた。

● 岡村昭彦と死の思想

高草木光一著

ベトナム戦争の報道写真家として知られた岡村昭彦は日本にホスピス（終末期医療）を紹介した思想家でもあった。生活レベルや医療技術の進展により「長くなった死の過程」と人々が向き合わざるを得なくなった現在、それを人生や文化の問題としてどう考えられるか。戦場を駆け巡り、生と死の極限を目撃してきた岡村は、看取りとは「死にゆく人からの学び」と説く。

（岩波書店・二九一六円）

岡村昭彦と死の思想「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス

ベトナム戦争の報道写真家として

知られる岡村昭彦(1929)

85)。世界の紛争地を駆け巡る

なかで「生命倫理」と「ホスピス」

に出会い、日本へ導入する先駆者

となった。彼が目指した理想のホ

スピス像とその思想を、著作や足

跡を通して読み解いていく。(住)

← たかくさぎこういち 高草木光一著 岩波書店

(☎03・5210・4000)

2700円



新刊紹介

岡村昭彦と死の思想

—「いのち」を語り継ぐ場としての
ホスピス

高草木光一 [著]

岩波書店／四六判／272頁

定価：2,700円＋税

ISBN 978-4-00-061107-7



ヴェトナム報道などで名を馳せたフォトジャーナリスト・岡村昭彦。56歳で早世する彼が、晩年にあたる80年代に、バイオエシックス（生命倫理）、患者の権利やホスピスの理念を日本に広める活動に情熱を傾けたことは、今どれほど知られているだろうか。何が彼をそのように駆り立てたのだろうか？

本書では、現代の医療や科学技術がはらむ諸問題に向き合ってきた著者が、岡村の波瀾万丈の生涯をつぶさにたどり、そのスケールの大きな世界観を読み解いていく。そして、既存の医療の枠を超えて社会変革をも射程に入れた岡村の「ホスピス」論の中に、超高齢社会の切実な問い——「尊厳ある死」とは何か、「長くなった死の過程」をいかに主体的に生きうるか——を解く鍵を見出していく。

名家に生まれ、東京医専を中退、渡辺淳一の小説のモデルともされる北海道での活動家時代など、とくにヴェトナム以前の知られざる前半生に光を当てる叙述は、強烈な個性と人を惹きつける魅力を湛えた「異能の人」の評伝、一つの戦後精神史としても興味深い。

岡村昭彦と死の思想

高草木光一

岩波書店 / 2916円

報道写真家としての岡村は知られているが、ホスピス運動の先駆者だったことを知る人は少ない。バイオエシックス（生命倫理学）という視点。ケアを通じた人間関係のあり方。ホスピスとコミュニケーション。現在へとつながる、生と死をめぐる課題がここにある。

新刊の本棚

岡村昭彦と死の思想

高草木光一著



岡村昭彦と死の思想
高草木光一著

岩波、反戦といったラ

ベルをはがして読んでほ

しい一冊。写真家・岡村

昭彦（1929〜85年）

はベトナム戦争最前線の

特ダネを雑誌「ライフ」

などに持ち込んで名声を

得た反面、強引な手法が

強い批判も浴びた。本書

は過剰な思いにあふれて

いた彼の思想をたどる。

戦争、差別など大きな

構図内の具体的な対象を

「世界史のシッポ」と名

付け、徹底してこだわっ

た。医療現場で重篤な患

者が生き方を選ぶ権利を

持てるはずと着想し、欧

米の生命倫理観を日本に

初めて紹介したという。

岡部伊都子さんに評価さ

れ、京都では遺作写真展

もあつた。作家渡辺淳一

さんとの接点などにも踏

み込むが、どこまでも冷

静な記述だ。著者の岡村

への愛情だろう。（岩波

書店・2916円）

■岡村昭彦と死の思想

「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス

高草木 光一〈著〉

岡村昭彦は1960年代、「ライフ」誌を舞台にベトナム戦争報道でデビューし、70年代も報道写真家、80年代以降はバイオエシックスとホスピスの探求者として、歴史に名を残している。その死から30余年、今なお彼はこの社会を考えるときの素材を提供している、著者は説く。

本書は岡村を通して、我々のありうべき死を考えようとの評論である。まず岡村の青年期の生き方（医学部中退、「山村工作隊」と思しき政治活動、札幌での悲恋など）を追いかけて、この破天荒な生を全うした人物の表裏を見つめる。なにゆえにベトナムに赴いて写真家たりえたのか、そのあとアイルランドでホスピスを知り、なぜこの運動に没頭したのか、その「真実」を探ろうと思案を続ける。

「世界史のシッポ」は、岡村が用いた独特の表現である。「世界史を怪物に見立てて、そのシッポを掴むこと、すなわち怪物に翻弄されるの

「破天荒な生」から死を考える

ではなく、怪物をこちらから自在に操る起点を探しだすこと」が岡村の歴史観だったという。彼はベトナム戦争のあとアフリカのビアフラ独立戦争でシッポをつかんだと自覚した。著者は、岡村が世界を見つづ歴史という舞台を縦横に動くことで独自の深みのある史観をもったとする。

この史観を構成する死生観について本書は多くの頁を割いている。日本のホスピス史は、太田典礼の説く積極的安楽死や初の「聖隷ホスピス」病院から進んでいくのだが、岡村は末期がん患者を集めての病院は、「非常に回転率の良い医療施設」であり、「もしマックス・ウェーバーが生きていたら『新しいプロテスタントの倫理と資本主義の精神』という名論文を書く」と鋭く批判した。

ホスピスを人権運動と捉え、看護学にも新しい倫理を提示して後進を育てた。こうした人物を抱えこむことによって、社会は一歩ずつ前に進むのである。

評・保阪 正康

ノンフィクション作家

岩波書店2916円/たかくさぎこういち 56年生まれ。慶応大学教授（社会思想史）。共著『社会主義と経済学』。

